
幼馴染 → → → 恋人になる条件

りんか@G*PARTY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染↓↓恋人になる条件

【Nコード】

N0097Z

【作者名】

りんか@G*PARTY

【あらすじ】

「結婚してください!!」——そうプロポーズしてきたのは、小学三年生の幼馴染の男の子。「あと15年経ってカッコイイ男の人になってたら、考えてもいいかも」と答えた次の日。高校生である相原美結の前にあらわれたのは、20歳くらいの超絶イケメン。その彼が面と向かっていきなり告げてきたのは、「結婚してください」という突拍子もない言葉だった。いろいろな条件をつきつけて彼からの求婚を逃げ続けるものの、なんだかなし崩し的に話が進んでしまっているような気がしてならない彼女と、そんな彼女にふりまわ

されているはずなのに、異世界で最強の力を手に入れたおかげで、
なんなく条件をこなしていつてしまう彼とのラブコメディ話（の予定）。

(1) (前書き)

ちよっと思うところがあり、衝動的に書いてみました。不定期更新になります。よろしくお願いします。

(1)

「結婚してください!!」

家を出て、高校へ向かう途中の通学路。突然響いたその言葉に、私は目を何度も瞬かせながら振り向いた。

そこには、ランドセルを背負った小学三年生になったばかりの男の子。その子が、すぐ真剣な顔でこちらを見上げている姿があった。見慣れたその子に、私はふう、と息を吐く。

「おはよう、あつくん」

軽くあいさつをすれば、黄色い帽子に包まれた頭をずっと私の方に押しやりながら、その子——あつくんはあいさつの返答もそこそこに、私へつめ寄ってくる。

「ねえねえ、いつ結婚してくれる？」

「いつって、それ昨日も一昨日もその前もきいてきたじゃないの」「だって、ちゃんと答えてくれないんだもん」

ぶつと頬をふくらませるあつくんに、私は苦笑いを浮かべた。そういう話題はあまり興味がない、て言ったらもつと怒るんだろうな、この子は。

私は「うーん」と首をひねりながら、まっすぐ立てた人差し指を唇に当てた。

「そうだなあ……、あと15年経って、あつくんがめちゃくちや力ツコイイ男の人になってたら、考えてもいいかも」

私の答えに、あつくんの顔がぱあつと輝いた。

「15年だね？ わかった。絶対だよ？ 約束だからね、美結^{みゆ}おねえちゃん！」

駆けていく背中を見送りながら、私は手を左右に振った。

可愛いなあ、と朝からほのぼののしてしまう。今日で何回目だろう、あつくんからのプロポーズ。今までは「急いでいるから、また今度ね」と適当にあしらってきたけど、今日は何となく条件を出してしまった。

彼は、将来イケメンになるんだろうな。幼いけれど、すごく整った顔立ちをしているもの。

15年……、かあ。思いついたまま口にしてしまったけれど、15年も経ったら、私は三十路超えのおばさんだ。どう考えても、眼中にはないだろうな。

「ま。もともと私、年下には興味ないしね」

そうしめくくって、私はいつものコースで高校へと向かった。

「結婚してください」

「……は？」

私の前には、ちょっと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

その彼に、私は通学途中の道ばたで、いきなり面と向かってそう告げられたのだ。

なんで？ どうして？

私の頭を、？マークが大量によぎっていく。

「あの、誰かと間違っていますか？」

「いや。きみは、相原美結さんでしょ？」

「そうですけど……、どうして私の名前を知っているんですか？」

「幼馴染だからね、きみとおれは」

「はい？」

いやいやいや。

私の幼馴染に、あなたのような超絶イケメンさんは、どこをひっくり返しても出てきませんから。

「やっぱり人違いですよ。他の“相原美結”さんを当たってください
い」

そう言っつて、私は彼の横を通り過ぎようとする。

と。私の手首がガツとつかまれ、振り向いた私に彼がつめ寄ってきた。その真剣な顔立ちに、私はデジャブを感じ思わず息をのむ。

「あの言葉は、嘘だったんだ？」

「あの言葉……っつて」

たずねられても、私には心当たりが全くない。

そんな私に、彼は少しだけさびしそうな表情を浮かべた。

「15年経ったら結婚してくれるって言ったじゃないか。美結、お

ねえちゃん」

「……！」

その言葉に、私は絶句してしまった。

確かに言った。確かに昨日、この場所でそう言った。

でも、ちよつと待つて。それを言った相手は、昔から知っている
幼馴染の小学三年生の男の子で――。どう考えても、目の前の超絶
イケメンと結びつかない。だけど、そう言ったのはあの子にだけで、
しかも他に兄弟のいない私を“おねえちゃん”呼ばわりするのは、
あの子だけしかいないと思う。

いやそんな。まさか、もしかしてもしかする、わけ？

「……あつくん、なの？」

「そうだよ」

そのあっさりとした返事に、私はただただポカーンとなりながら、
目を見開くだけだった。

(2)

……ハッ。

秒針がきつちり一回転したんじゃなかるつか、それくらいきつちり間を置いて、私は我に返った。

ありえない。落ちついて普通に考えてみたら、ありえない。そう、ありえないでしょうが。

この超絶イケメンが、幼馴染で小学三年生のあつくん？ そんな簡単にイコールで結びつくわけがないってば。

なにこれ、新手のあつくんですよ詐欺？ ああもう、よくわからなくなってきた。こういうときは――。

「じゃあ、そういうことで」

なかったことにするのが一番だよな。学校に遅刻するとマズイし、うん。

通り過ぎようとした私の手が、再び引かれる。しまった、手首つかまれたままだった。

「ちょっと待ってよ！ まだ、何か足りないものでもあるの？ 約束どおり、15年経ったからきみを迎えにきたのに」

いやあの、意味がわかりません。

15年経った？ 昨日の今日で、まだ一日しか経っていないはずなんですけれど。

それより何より――。

「本当にあつくん、なの？」

「そつだよ。きみの家の二軒隣に住んでいた、瀬田秋斗^{あきと}」

超絶イケメンが名乗った名前は、確かにあつくんの本名だった。

「なら、証拠はある？」

「証拠？ …… 困ったな。こつちの世界のものは、全部彼に処分されてしまったんだ」

ん。こつちの世界？ 処分？ なんのこと？

なんとなく気になるワードが並んだけれど、超絶イケメン——いい加減この呼び名も疲れたし、超イケに略しちゃおう。

考える仕草を見せていた超イケは、ふいに「ああ、そつだ」と手をたたいた。

「証拠になるかわからないけど、おれが覚えているきみの情報を話してみるよ。相原美結、17歳。ちよつとくせつけの黒髪黒目の純和風人。○×高校三年生。両親が海外赴任のため、今は一人暮らし。兄弟姉妹はいない。掃除は得意なのに、料理は壊滅的。自分では美味しいと思っているものだから、たちが悪い。この前……、でいいのかな？ 砂糖と重曹を入れ間違えて斬新すぎるクッキー？ みたいなを作ったこと、あったよね？」

ちよつとそこ。クッキー？ とか疑問系にしないで。

あれはクッキーだったの。誰が何と言おうとも、ひよこ型のクッキー。

まあ少しいびつになっちゃって、うねうねとした怪しい生物になっってしまったけれど。

「砂糖と塩を間違えるのは聴いたことあるけど、重曹って。…… ああ！ もしかして、砂糖じゃなくてベーキングパウダーの代わりに

入れたの？ それなら、納得かな」

「え、と別にそういうわけじゃ……」

「重曹を使おうなんて、普通思わないのにね。でも、一人暮らしの女の子の家に食用の重曹がある時点で、めずらしくてすごいことか」

腕組みして感心したようにうなづく超イケに、私は苦笑いを浮かべた。

全然きいてないし。なんなの、この自然にプラス思考というか、天然っぽいマイペースっぷりというか。

けど、このことを愚痴——もとい、話した異性はあつくんだだけだ。まさか本当の本当に、この超イケは……。

「ね？ こんなこと知っているのは、おれが正真正銘の秋斗だからでしょ？」

嬉しそうに告げてくる超イケに、私は口ごもる。

もし仮にこの超イケがあつくんだとして、どうして急にこんな姿になったわけ？ 現実では、絶対にありえない。まさか青いロボットの力を借りて、未来からタイムスリップしてきたとか？

そういえばさっき、なんかちょっと引っかかりのある言葉が——。

一人無言で考えていた私を、どうやらまだ疑っていると思ったら、しい超イケは、「まだ信じられないの？」と嘆息した。

「なら、とっておきの情報を一つ。きみ、家ではノーブラで過ごしているよね？ 前にきみの家にお邪魔したとき、ちょうど窓から差し込んだ光にシャツが透けて——」

「わぁあああぁっ」

なにっ？　なにを突然言っちゃってくれてるの、この人！？

思わず胸元を両腕でおおう私に、超イケはニコツとさわやかな笑みを向けてきた。

「すごくドキドキしたんだから、おれ。相手が小学生だからって、警戒心なすぎ。とまあ、これで信じてもらえた？」

(3)

た、確かに超イケが言ったことは正しい。

私は、不自然なほどにゆっくりと胸から手をおろすと、身体を斜め45度ほど右に動かした。

「まあ、うん。どうしてそうなったのか全然理解できないけど、超イ……もとい、あなたが“あつくん”だってことは信じてもいいかもしれない」

深呼吸を繰り返しながら答えた私に、超イケの表情がまぶしいほどに輝き始める。それが、初めて結婚の条件を出したときのあつくんと重なった。

うわ……、そういえばこんな顔してたなあ、あの時も。本当の本当にあつくん、なんだ――。

少しだけ感じ入っていた私に、彼は嬉々としてサラリと告げてきた。

「なら、おれと結婚してく――」

「それとこれとは話が別」

あつくんの言葉をさえぎり、私はそう言いになった。途端、見る間にあつくんの表情が暗いものになっていく。恨めしそうな視線をむけてくる彼に、私は思わず目をそむけた。

「そ、そんな顔しても駄目。だって、言ったでしょ？ 15年経つて、めちゃくちゃカッコイイ男の人になってたら、考えてもいい“かも”って」

15年経って、めちゃくちゃカッコイイ男の人になってたら——
その部分は、否定できそうにない。

イケメンになるだろうな、とは思っていたけれど、まさかこんな、
某アイドルグループも裸足で逃げ出しそうなほどになるなんて……、
予想外すぎです。

「それにね、女性に結婚を申しこむんだったら、やっぱり何かしらの贈り物が必要だと思うの。えっと、そう。婚約指輪とか」

「婚約、指輪？」

「そうよ。よくテレビドラマでもやってるでしょ？ 給料の三か月分です、みたいな。あつくんがどれだけ私のことが好きなのか、態度で示してもらわないと。ちなみに私、そんじょそらのダイヤとか、普通の宝石には興味ないからね？ とびっきりレアな感じじゃないと、受けつけません」

われながら、むちゃくちゃな条件だ。

でも、結婚なんてまだ考えられないし、しかも相手は、見た目が変わってしまったとはいえ、幼馴染のあつくん。正直、恋愛対象としては全く意識したことがない。

無理を言っただけであきらめさせた方が、彼にとってもいいに違いないよね。

それが通じたのかどうか、彼はふう、と短く息をはいた。

「……確かに、プロポーズするのに手ぶらというのも、おかしい話だったね。わかった、婚約指輪を持って出直すことにするよ」

その台詞に、私は胸中でひそかにガッツポーズ。

ん。出直す……？

「でも、きみの気に入る指輪を持つてくることができたら、今度こ

そおれと結婚してくれる？」

私が彼の言葉にひっかかりを覚えているうちに、彼は真剣な表情でつめよってくる。その様子は、ほんとあつくんと同じもの。変わらない、なあ……。

そう、しみじみと感慨にふけっていたら、私は曖昧ながらも首を縦に動かしていた。……あれ？

彼の落胆していた顔が、一瞬にして満面の笑みになる。

「絶対だよ？ 約束だからね、美結おねえちゃん！」

駆けていく背中——私の記憶の中にあるものより、はるかに大きくなってしまうたそれを見送りながら、私はひしひしと押し寄せてくるデジャブを感じて止まなかった。

次の日。また同じ通学路を歩きながら、私はキョロキョロと辺りを見渡していた。

人通りの少ない、静かな通り。いつもと変わらないその場所に、私は吐息をついた。

昨日のあれは、やっぱり夢か幻？——そっか。私もついに、夢遊病をわずらうようになったのか。とはいっもの、すごくリアルすぎた夢だったような気がするけれど。

(4)

それに――。

ここに来る途中、ちょっと気になって二軒隣の家をのぞいてみたら、不思議なことが起きていた。

一昨日までは確かにあったはずのあつくんの家が、文字通り消えていた。ポツカリと空き地になっていたわけではなく、両隣だったはずの二つの家がそこには仲良く並んでいて。

まるで、あつくんの家自体、そこには存在していなかったようだった。

「どうなっているんだか……」

首をひねるものの、それで答えが出るわけもない。

その後私は、いつものように平穩無事に高校へとたどりつくことができた。

一日の授業が終わり、帰宅部の私は早々に学校を後にした。朝来た道を、今度は逆に進んでいく。

ああ、そうだと空の雲を見ながら思い出す。牛乳切れてたんだっけ、買いに行かなきゃ。さっき通り過ぎた交差点を右折して――あ。

そういえばここは、と気づいて、私は後ろに戻しかけた視線を前に向けた。その先には――、昨日と同じ、ちょっと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

しまった、帰り道はノーガードだった。

「美結おねえちゃん！」

私を見つけてしまったらしい、後方からあがる嬉しそうな声。

私はそれをなかったことにして、早々に来た道を引き返し始めた。

「ま、待つてよ！ どうして帰っちゃうの？」

「どう見てもあなたの方が年上っぽいのに、私を“おねえちゃん”って呼ぶのおかしいでしょ？ だから、私を呼んだんじゃないんだと思って」

「そんなこと言われても、おれ、きみをそう呼んだことしかないし……。じゃあ、なんて呼んだらいい？ 美結ちゃん？ 美結さん？」

そこで一度言葉をくぎった超イケは、少しとまどったあと、ゆっくりとその言葉を口にした。

「美結」

「……！」

それが耳をうった瞬間、私の心臓が大げさなほどに飛びはねる。ストップ！ ストップ！ 呼び捨てはちよつと……、駄目っばいです……！ 横に並んだ超イケに、私は思わず抗議の眼差しを向けた。すると、彼は少し照れたように頬をかく。

「って、さすがに呼び捨てはすぐに慣れそうにないから、とりあえず、美結さんでいいかな？」

そう告げてくる超イケに、私はコクコクと何度もうなずいた。呼び捨てにされるより、全然いいです。ぜひ、そうしてください。

「じゃあ、美結さん。あらためて、おれと結婚してください」

また、それですか。と、私が嘆息するのと、彼が懷から何かを取り出すのは、ほぼ同時だった。

差し出されたのは、革製の、なんだか上等そうな雰囲気の小箱。見当もつかない私は、当然のように首をかしげた。

「なに、これ？」

「なにつて、きみが望んだものだけど」

「はい？」

私、なにか望みましたっけ。……あ。

私が思い出すのと一緒に、小箱が開けられる。そこからあらわれたのは、大人が親指の爪と人差し指の爪をくっつけて。を作ったくらいに大きな宝石。超イケが少し動かすと色が変わり、数えた限りでは七色はあった。

えっと、これはその、もしかして――。

「婚約指輪、これでどうかな？」

やっぱり、そうですか。

私は、自分の口元がいやでも引きつるのがわかってしまった。

「宝石自体は、あつちの世界のドラゴンの王が持っていたからすぐに倒して手に入れたんだけど、それを指輪に加工するのに手間取っちゃって……。遅くなって、ごめんね」

かすかに眉を寄せながら、超イケがそう謝ってくる。

あの、ですね。私の気のせいならいいんですが、この人さり気なく、ものすごいことを言いませんでした？

(5)

「ドラゴンの王を……、倒した？」

いぶかしげに訊ねる私に、彼は素直に「うん」と返事をした。

「彼に相談したら、一番高価な宝石はドラゴンの王が持っている、教えてくれたからさ。宝石の価値なんて正直どうでもよかったんだけど、早くこっちに戻ってきて美結さんに会いたかったし、それにしようと決めたんだ。魔物の中では3本の指くらいに入る強さだったらしいし、少してこずったけど問題なかった」

問題なかったって、いや、そういうレベルの問題じゃないような……。

簡単に倒したみたいに聴こえるけど、ドラゴンって……、漫画とか小説とか映画とかでボス級の扱いをされている、あのドラゴンのこと？

「ドラゴンって、ファンタジーの世界に出てくる翼のあるトカゲみたいな顔のやつよね？ めちゃくちゃ大きくて凶暴な……。そんなのがいるの？」

「ああ、うん。あっちの世界はね、こっちと違って魔物がいるんだよ。ほら、ゲームであるでしょ、ロールプレイングゲーム。あんな感じにお城もあるし、もちろん王様やお姫様、魔王だって存在する。そんな世界なんだけど……。美結さん、わかる？」

「全然」

即答する私。

いきなり異世界の話もされても、ああそうなんだ、と簡単にうな

ずけるわけがない。

私もそれなりにゲームをかじった経験はあるけれど、そんな世界が現実存在しているなんて、突拍子もなさすぎる。

でも、と私は彼の服装をまじまじと凝視した。異民族風の、動きやすそうな上下の服。これに剣を装備していたら、確かにゲームに出てきそうな格好、なんだよね。

私の視線に気づいたらしい、彼はちょっと照れたように頭をかくと、手にしていた小箱を更に差し出してきた。

「おれからの気持ち、受け取ってくれるよね？ 美結さん」

「あ、えっと……」

「もらって、くれないの？」

しゅん、と肩を落とし憂いにしむ超イケ。その悲しそうな顔に、昔、小さなあつくんに意地悪をしてしまったときにわきおこった感情が、ふつふつと私の心を占め始める。

う、受け取ってしまえば、一步結婚に近づいてしまう。私は、グツと拳を強くにぎった。

「あいにくだけど、もらえない。異世界のものと聴いて、なおさらよ。それを私が持つことになったとして、こっちの世界に絶対に影響がないとはいえないもの」

そう、ここで負けてしまうわけにはいかない。

たとえ、超イケの整ったフェイスがどんどん崩れていく様子をとらえてしまつて、目をそむけるタイミングを逃してしまったとしても。

そう、簡単に受け取るわけには――。

「そ、そんな顔されても……、もらうわけには……」

私の振りしぼった声に、超イケの顔がますます暗くなっていく。

……。

……。

だ、だめ……っもうむり……っ！

そう思った瞬間、私は彼から小箱をひったくっていた。

突然のことに、何が起きたのか理解できなかったらしい、呆然となる彼。自分の空になった手と私を、ゆっくり交互に見つめ――、その表情が一瞬で喜びに包まれた。

「受け取ってくれたってことは、美結さん……！ おれとけっ――」
「結婚はまだ無理！」

両手をひろげ、今にも抱きついてきそうな彼の前に、私は右のてのひらを突きつけた。と同時に、視線を彼からサッとずらす。きつとまた、さっきみたいな顔で私を見ているに違いないんだもの……！

「もし仮に私とあなたが結婚したとしても、住む新居がないわ。それに、生活する上での収入はどうするの？ 私は高校生だし、収入はゼロ。あなたも――、見るからに働いている風には思えないもの。先行き不安な結婚生活なのに、結婚なんて出来るわけないでしょ？」

(6)

私のまくしたてを、超イケは目をパチクリさせながら聴いていた。その表情が、見る間にパアッと輝いていく。こ、この顔は、なんだか嫌な予感が――。

思わずあと退りする私の両肩がガシツ、とつかまれ、その衝撃で私の手にしていたかばんが地面に落下する。

「美結さん……、おれ、嬉しいよ」

「はい？」

感動したように声をふるわせながらそう言ってくるものだから、割れ物なんて入ってなかっただろうか、とかばんの中身を順に思い浮かべていた私の思考が一気に霧散した。

嬉しい？ どこをどう聴いたら、その単語が出てくるのでしょうか。

私は、断ったつもりなんですけれど。あ、やっと私の気持ちかわかって――。

「嬉しいけど、同時に自分がすごく恥ずかしいよ」

私の思考をさえぎるように、彼の澄んだ声がひびく。

突然、真剣な眼差しを向けられ、私は不覚にもドキッとしてしまった。

「今の今まで美結さんと結婚することしか頭になくて、本当にごめんね。美結さんは、その後のことまでちゃんと考えてくれていたのに」

……は？

「いやあの、それは……！」

「安心していいよ、美結さん。おれ、今すぐあっちの世界で就職してくるから！」

私の返事もそこそこに流して、彼はクルリと背を向け走り始める。

ファンタジーの世界？　で何になるつもりなんだろう。
というか就職するのって――、あっちの世界でなの？

呼び止めてたずねる暇すらもなく、すぐさま小さくなってしまった彼を見送っていた私は、一度、二度とまばたきをくりかえしてから思い出したようにつぶやいた。

「……牛乳、買いにいこ」

いつものスーパーで牛乳と、ついでに広告の品に名を連ねていたあんぱんを4つほど買い、出入り口の自動ドアをくぐる。と、視界の隅に入っただのは、スーパーに併設されている100均のダゴゾー。

「あ、そうだ」

ふとひらめいた私は、スーパーの袋を片手にそちらへ足を向けた。

「そんなところで何をしているの？ 美結さん」
「！」

また次の日の朝。

私はいつもと違う道を選択し、曲がり角の壁に身を寄せながらあの場所をのぞきこんでいた。遠目でだれもないことを確認すると、ホッと安堵の息と共に高校へ向かおうとして——、声をかけられた。私は両肩をはね上げ、マツハの速度でふりかえる。そこには、きよんとした表情の超イケの姿。

この前とは全然印象の違う、なんだか軍服っぽい服装にマント。胸元で、立派な勲章っぽいものが揺れる。短い髪はきれいに整えられていて、これで白い馬にでも乗っていたものなら——、完璧に白馬の王子様だ。

雰囲気変わって、見た目の破壊力が増している。確実に。
ふう、と私は吐息をついた。

「どうして、超イ——もとい、あなたがここにいいのかしら？」
「どうしてって、美結さんがここにいるからだけど」

不思議そうな顔で私を見下ろす超イケ。

ああ、そうですか……。

超イケ——ってこの呼び名も、そろそろ変えた方がいいかもしれない。

口からすべってしまったて、それをいちいち訂正するのもめんどくさいし。

あつくん、はイメージが幼い小学三年生の彼に固定されているか

ら、不便な気がする。

ちよつと丁寧にして、あっさん？ 紅茶の品種に似たようなものがあつた、うん。

瀬田さん、瀬田くんって苗字で呼ぶのは今更過ぎるか。

じゃあ、まあ普通に――。

うん。普通……、でいいか。

「美結さん？」

「ああ、ごめん。それで、今日は何の用？ 秋斗、くん」

「……！」

(7)

ガバツ。そんな効果音が聴こえた——、ような気がした。

次に我に返ったとき、私の身体は彼の両腕の中にスッポリと収められていた。

……。

……？

………！

ぎゃあああああ。

昨日に引き続き、私のかばんが地面に落下する。

お弁当、と一瞬思っただけれど、そうだった。今日のお弁当は、昨日買った広告の品のおんぱん。個包装だから、モーマンタイ。つぶれている可能性は、とりあえずスルーで。

それより何より、この状況の方をどう——。「美結さん……！」
感極まった声で呼ばれ、私はつかつにも両肩をビクツとはねあげてしまった。

「今おれのこと、秋斗って……。おれが瀬田秋斗だって、認めてくれたんだね？　すごく……、すごく嬉しいよ」

ギュツとさらに強く抱きしめられ、「ありがとう」なんてささやかれるものだから、私はそのまま力チーンと硬直してしまった。

見た目に合った、さわやかなイケメンボイス。耳元での破壊力は、げに恐ろしきものでございました——。

ようやく解放されたものの、私は目を見開いた状態のまま固まっていた。

そんな私にはお構いなしに、「でも」と彼は続ける。

「名前で呼び合うなんて、なんだか照れちゃうね。……恋人同士、みたいだ」

はにかんだ表情で後ろあたまをかきながら、彼は少しだけ私から視線をそらした。

あの……、ですね。

さっきの行動といい、その関係を飛び越えて結婚なんて言い出しているくせに、なんで一歩手前でそんなに恥ずかしがっているんですか。

私が胸中でどうにかツツコミを入れていると、「ああ、そうだ」と秋斗くんがポンと手を叩く。落ちていた私のかばんを拾い、それと一緒に人懐っこい笑顔も向けてくる。

「美結さん、聴いて。おれ、ちゃんと就職してきたんだ！」

あ、どおりで服装が変わっていたわけですね。
納得しながら、かばんを受け取りお礼を言う。続けて「就職、おめでとう」とも口にしたけど、昨日の夜↓朝ってそんな短時間で書類審査や面接が行われたってことから――、大丈夫なの、その会社。私的には、公務員とか安定したものがいいなと思うんだけど。

「そうなんだ。何になってきたの？」

「うん。おれね、城の兵士に志願したんだ」

そうですね。こんな格好の公務員いたら、即クビですよえ。
私の安定生活プロットが、あっけなく崩壊していく。

公務員だったらそこその給料はもらえるし、私も高校卒業してそのうち働きだせばそれなりの生活がおくれ——ん？ 私はどうして、そんな生活プロットを？

やばい、やばい……。彼に、もろに影響されてきている。

内心で頭を抱えている私をよそに、秋斗くんは苦笑しながら詳細を語りだした。

「すぐに採用されて魔物討伐に連れて行かれたんだけど、一人で倒してしまつたら、その。一般兵から兵士長に推薦されたんだ。そのあと城に多くの魔物が襲つてきて、それもまたほぼ一人で撃退したら、次に城に呼ばれたとき、叙勲式と同時に一番の名誉と言われる王宮騎士に任命されてた。ほら、これがその証」

そう言つて、秋斗くんは胸元の勲章っぱいものを指し示す。

つて、一晩で出世街道をどんだけ突つ走つたんですか、あなた。

「お、王宮騎士って偉い人みたいだし、忙しいんじゃないの？」

「うん、そうだね。王様やお姫様の要人警護とか、魔物の討伐隊の組織や対処とか、仕事はいろいろあるみたいだよ」

「こんなところにいるのも大丈夫なの？ 早く戻らないと、周りに迷惑なんじゃ……」

「ああ、それなら気にしなくてもいいよ。未来の婚約者のところに行つてくる、てちゃんと伝えてきたから」

嬉しそうに、そう告げてくる秋斗くん。

いや、まだOKした覚えはないんですけど、私。

でも、そんなことを口にすれば、どうせまた——。同じ轍は、二度と踏まないようにしないとね。

無言をつらぬく私に、彼は少し驚いたような表情を浮かべていたけれど、すぐさま最強の輝きと共に顔をほころばせた。

「否定……、しないんだ？ 嬉しいよ、美結さん……！ おれ、美結さんのこと、絶対に幸せにしてみせるから！」

ん？ あれ？

何かがおかしいと思うのは――、私だけでしょうか。

『おれ、美結さんのこと、絶対に幸せにしてみせるから!』その台詞がどうして現れたのか、私の頭の中で分析が開始された。

秋斗くんがお城の兵士になって、どうやら王宮騎士にまで出世したらしい。

「それでね、この前言ってたもう一つの条件なんだけど」
「ええ」

私は、首を縦に動かす。

そこまでは何も問題はなかったはず。

どこからおかしくなったのかしら? その後は、確か――。

「美結さん、やっぱり新居は広い方がいいのかな?」
「そうそう」

王宮騎士の仕事の話になったんだった。

それで、そう。未来の婚約者のところに行ってくるって告げられて――!

「そうなんだ。じゃあ、お城くらいの大きさがいいってこと?」
「それよ――!」

“未来の婚約者”に、ツッコミをいれ忘れていたんだわ、私。
ああ、もう。そのせいで、あの台詞が出てきちゃったってわけね。
――油断した。

ようやく合点がたって、私は意識を秋斗くんへ戻した。

視界にとびこんできたのは、やけに満足そうな彼の笑顔。だいが見慣れてきたとはいえ、その表情にはなぜだろう、嫌な予感しかわいてこない。

「わかった。いい場所を探してくるから、楽しみにしておいて」

うなずく秋斗くに、私は目をまばたかせた。

いい場所？ と、私の中で？マークが大量発生する。

「何の話？」

「またね、美結さん。次こそは、いい返事をきかせて欲しいな」

「は？ だから、何の話を……って人の話をきけええっ！」

勝手に走り始めた背中に私は思わず声をはりあげたけれど、大きく耳をもたないらしい彼の姿は、そのまま小さくなり、そして消え去った。

って何回目ですか、この展開……。いつまで続くんだろう——と
考えて、私ははた、と気づく。

「これってもしかして、私が結婚をOKするまで終わりが無いってこと……？」

まさかね。

まさか……、よね。

そろそろ彼も、飽きるか失敗くらい、するわよ、ね？

15年後にやってきて、すごく高価らしいドラゴンの宝石で作った指輪をもってきて、さらに一番の名誉と言われる王宮騎士にもなつて……。って、どれだけハイスペックなんですか、あの入。

今までの彼の成績を並べてみると、彼に不可能はないんじゃない

だろうか。そんな不吉な考えに直面する。

今回はどうして帰ってしまったのかわからないけれど、とりあえず次の条件がまだ必要なら、そう簡単にクリアできないようなものにしないと。

あちらの世界は、ロールプレイングゲームみたいな世界だっ言っていた。ロールプレイングゲームの最終的な目的は――、そうよ。あれしかないわ。

ひらめいた私は、唇をかみしめ静かにうなずいた。

来るなら来なさい、秋斗くん。今度こそ、絶対にあきらめてもらうんだから……！

「……っ」

今日も私は、キョロキョロと辺りを何度も見渡すという怪しい素振りを見せながら、いつもと同じ通学路を歩いていた。

おかしい。こんなに何もなくて、おかしすぎる。

私は、かばんを持つ手に力をこめた。

あれから、いつの間にか一週間が過ぎていた。

彼が――、秋斗くんが「またね、美結さん」って言いながら走り去っていったのが、ついこの前のような気がする。これも何かの布石なわけ？ と警戒しながら次の日以降を行動したものの、結局何も起こらずに私は嘆息を落とす。その繰り返しだった。

あ、と一つ思い当たり、私は足を止めた。

「やっと、あきらめてくれたってこと？」

いろいろ条件をつけたし、何かしらクリアできなかったのかもしれない。私に愛想をつかしたってことも考えられるか。

それともあれは――、やっぱり夢か幻だったのかしら？

チラリ、と消失したままの彼の家を見やりながら、私はいつも通り高校へと向かった。

(9)

「うん、今日もいい出来じゃない」

ふう、とトングを持った手の甲で前髪をはらいながら、私は自信満々に笑みを浮かべた。

目の前には、ガスコンロとフライパン。フライパンの中には、緑と黒に彩られたパスタの姿。緑は冷蔵庫にあったレタス、黒は今日の特売で買ってきたあんこ。ちよつとした隠し味に、と最後にコーヒーを入れてみる。

白い皿にもり、きざみ海苔をパラパラかけて。ちよつと和風っぽさをつけ加えれば――よし、夕飯完成、と。

キッチンからその自信作を持って、私はリビングへ移動した。テーブルに置きながら、ソファーにほりつ放しだったダゴゾーの袋を見つける。皿の代わりにそれを手にすると、私はソファーに腰をおろした。

「対処法になると思ってたのに、無駄になっちゃったか」

袋の中身をのぞきこみ、短く嘆息する。

それにしても、本当にどうしちゃったんだろう。急に顔を見せなくなると、気になってしょうがない。

私に愛想をつかせたくらいだったら、全然問題はないんだけど。むしろ、その方がいいし。でも――。

ふ、と私の脳裏を、秋斗くんのさわやかな笑顔がよぎっていく。って、このタイミングで、くつきりはつきり出てこられると、なん

というか非常にマズイ感じが……！

こ、これがもし彼の作戦だったら——、そう思うと少しだけ背筋がゾツとした。

でもあの性格だし、そんなに深くは考えていなさそうな？ 王宮騎士になったって言うてたし、忙しいんだろう、きっと。

そう結論づけて、私はテーブルのあんこ入りパスタに手を伸ばした。と、その時。

ピンポーン。来客を告げるチャイムが、部屋中に響きわたった。こんな時間に、誰だろう？ 宅配便なんて、予定にあっただけ？ ソファアから立ち上がり、玄関へ向かう。

「どちら様ですか？」

たずねてみたけれど、返事はない。

怪しく思いながら、チェーンロックをした状態で扉をそつと開く。ガシッ。それを待っていたかのように、あいた隙間から四本の指先が入りこんできた。

な、なにこれ……！ どこそこのゾンビ映画に出てきそうなシチュエーションに、私はあわてて扉を閉めようとしたけれど、想像以上のパワーに引かれ、私は早々にギブアップ。最後まで抵抗していたチェーンロックが、あっけなく千切れとんだ。

防犯の意味、なさすぎる。

あきらめて成り行きを見守りながら、私はそんなことを思っていた。

その後、何事もなかったように家に入ってきたのは、さっきまで私の思考を独占していた人物。

「ああ……。やっと、開いた」

「秋斗、くん……。!?」

ホ、と息を吐いてから、彼は私にいつもと同じ雰囲気的笑顔を向けてくる。

「こんばんは、美結さん。会いにきたよ」

「!」

私は、彼の破壊力満載の笑みを目にした途端、はじかれたようにリビングに戻った。

ダゴゾーの袋をあさり、手にしたそれを目の辺りに装着する。ふう、と大きく深呼吸をしてから、私は手探りで玄関に引き返した。

「どうしたの、それ。福笑いでもしていた?」

秋斗くんが、不思議そうにたずねてくる。その声に、彼のいる場所のだいたいの予想がついた。

ふふふ。これなら、彼の笑顔やら何やらにまどわされることは絶対のないものね。真っ暗な視界で、私は彼がいると思われる方向に、してやったりとうなずく。

「これ、アイマスクだね?　もしかして見えてるの、おれの動き」

ヒラヒラ、と目の前で手を動かされているのか、かすかに鼻の辺りに風を感じる。

……。まあ、うん。

彼が何をしているのかよくわからなくなってしまうのが、これの最大の難点といえば難点だ、けどね……。って、え。

「……!？」

次に訪れた不意打ちのようなやわらかさと苦味に、私の全てが力
チーンと硬直してしまった。

(10)

……ナニガ、オキテイルノデショウカ。

コノ、クチビルニカンジルモノハ、ナニ？

リカイフノウ。リカイフノウ。リカイ、フノウ――。

「あれ……、美結さん？」

呆けたような声と一緒にアイマスクが外され、私はどアップで秋斗くんの整いすぎた顔を直視するハメになってしまう。ショートしかけの思考に、それはまさにガード不能の即死コンボ。ヘナヘナヘナ、と私はその場に座りこんでしまった。

「ど、どうしたの、美結さん。大丈夫？」

「ダ、ダイジョブ……」

答えたものの、あまりにカタコトすぎるその日本語。心配そうにのぞきこまれ、私の視点はすぐさま、秋斗くんの唇に集中してしまう。

いやあああああ！！と内心頭をかかえながら、私は必死に彼から距離を取ろうとする。が、さすがチェーンロックを素手でぶち切る怪力の持ち主。私の手首がつかまれ、さらに彼の顔が接近してくる。

「顔真つ赤だよ？　もしかして熱でもあるの？」

そうのだまいながら、秋斗くんの手が私の額に当てられる。
ひえ……！！

「熱い気はするんだけど、よくわからないな。ちょっと、ごめんね」

断りをいれられ、私が見開く中で次にされたのは額と額のこつんこ。って、そんな可愛いものじゃないっ。

ち、近い……っさつきから、近すぎる……っ！！

もがこうにも、圧倒的なパワーに押さえつけられて、私の身体はビクともしない。

あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”。

鼻先と鼻先がふれあう。

そのたびに私の心臓は耳に痛いほどの鼓動音を訴えてきて、私の鼓膜はいつかそれに破られそうだった。

ようやく解放され、自由を手に入れた私はあわてて彼から離れる。完全に腰がぬけてしまったようで、私は立ち上がれそうになかったと、とりあえず、怪しまれないように何かしないと。

「熱はなさそうだね、よかった。でも、さつきから美結さん、ゴキブリみたいな動きしてるけど、どうしたの？」

秋斗くんの指摘に、私はハッと我に振り返りを止めた。どうやら何も思いつかなかつたらしい、私は四つんばいのまま、とりあえずその辺をウロウロと歩き？ 回っていたようだった。

しまった、これじゃ逆効果だ。これでもかというほど、怪しすぎる。

「な、なんでもないわ」

足に力が入るようになったのを確認し、私はゆるゆると立ち上がった。

はあ。一時は、どうなるかと思った……。

白状すれば――。

私の視線は、気づいたらずっと彼の唇にばかりいていました、けれど――。

「ところで、おれはいつの間にここに来たんだろう？」

突然ふってわいたその質問に、私はギギギ、ときしんだ音が立ち
そくなほど不気味な首の動きで、秋斗くんを見上げた。

はい……？

この人はまた、何を言いだしたのでしょうか？

「祝勝会でエール酒を飲まれたことまでは覚えているんだけど、
それからさつき美結さんのアイマスクを取る辺りまでの記憶が全
くないんだ、おれ」

秋斗くんはそう言いながら腕組みをし、「うーん」と首をひねる。

お酒を飲んで記憶がない？ それって、つまり――。

私が結論を出すより先に、秋斗くんの先制パンチが私にくりださ
れた。

「でも、美結さんがアイマスクしていたんだったら、チャンスだっ
たのかな？ しちゃえばよかった――、キス」
「――！」

最後の二文字に過剰反応してしまった私は、ズササササ――と自
分でも驚きの速さで、彼から距離を取った。その間0.3秒ほど。
そのうち、瞬間移動も夢じゃないかもしれない。

グッと拳をにぎりそうになって、私は一気にしらけモードに入っ
た。

……そんなことはどうでもいいから、とりあえず落ちつつ。落
ちつつ、私。

「——で。今回は何の用？　うちのチェーンロックを破壊してまで住居侵入をしたくらいなんだから、それ相応の理由があるはずですよ？」

深呼吸を二、三度くりかえしてから、私は秋斗くんを問いたです。すると彼は、パチパチと目をまばたくと、その整った顔を斜めにかたむけた。

「チェーンロックを破壊？　おれ、そんなことしたの？」

不思議そうに答えてから、秋斗くんは玄関ドアの方をふりかえった。そばまで歩み寄ると、千切れたままのチェーンロックを手に取り、「これをおれが？」と私にたずねてくる。

別に隠す必要を感じなかった私は、素直に「そうよ」とうなずいた。

「そつか……。ごめんね、美結さん。きみが気に入るような新居をようやく手に入れたから、早くきみに知らせたくて、きみに見てもらいたくて、おれ、気が急^せいでいたんだと思う」

チェーンロックを両手で包むように持ちながら、秋斗くんは本当に申し訳なさそうな表情で私に謝罪する。

彼も悪気があったわけじゃないみたいだし、本来なら切れるはずのないものがただ切れただけで、私としては弁償してもらえればそれで——って。ん？　新居、ですって？

私はその言葉に疑問をいだいた、次の瞬間。秋斗くんの両手が、無造作に開かれた。そこからあらわれたのは、何事もなかったよう

に流れ落ちる一本のチェーンロック。

そう、一本。千切れとぶ前と全く変わらない、そのフォルム。

はい……？ 理解の範疇はんちゆうをとくに超えすぎてしまって、私はただただ呆然となる。

あの。いつたい、なにが起きたのデシヨウカ？

「これで、よしと。とりあえず直しておいたから、勘弁してもらえないかな？」

ニツコリ笑顔を向けてくる秋斗くんの横をすり抜け、私は玄関ドアに走り寄った。

宙にブラブラと浮遊するチェーンロックをつかみ、マジマジとながめる。千切れているどころか、ヒビ一つない。

私はそばにたたずんでいる秋斗くんの両手を取り、その手のひらをジッとくまなく調べ始めた。

「そ、それでね、美結さん。新居なんだけどさ——」

動揺した声が聴こえるけど、とりあえず無視。

ハンドパワー？ それとも何かのマジック？ 全然、わからない。わからないけれど、この手にチェーンロックを壊されて直されたのは事実だ。

彼に不可能はないのかしら、本当に——。

「きみに、実際に見て欲しいんだ。だから、その……」

すばんでいく台詞に、私はスッと秋斗くんの手を解放した。背筋を伸ばし、視線を下に落とした状態の彼に向き直る。

「ねえ、秋斗くん」

「え、なに？」

「私が次に出す条件をクリアすることができたら、その新居を見に行ってもいいわ」

「ほんと！？」

うつむいていた顔をあげ、興味津々ときいてくる彼に、私は大きくうなずいた。

ええ、本当よ。だって、この条件はそうそうクリア出来るものじゃないって自信があるんだもの。

見てなさい、秋斗くん。その完全無欠のキラキラ笑顔を、昔私の前で一度だけのぞかせた、なつかしの泣きじゃくり顔に変えてやるんだから……！

「私の次の条件は——、“世界を救うこと”よ」

「え……」

ピツと人差し指を立てながら条件を告げる私に、秋斗くんは絶句した。

ふふふ、早速効果アリってやつかしら？

得意げに、私はつづける。

「あなたの世界、魔物がいて確か魔王もいるって言うてたわよね？ そんな危ない世界を、平和な世界にしてみせてよ。世界のために奮闘して。私、結婚するならそう——、世界の救世主様がいいわ！」

そう。ロールプレイングの世界だったら、最終的な目標は魔王を倒して世界を救うこと。

なら、そう簡単にクリアできるはずがないわよね？

私が胸中でふんぞりかえっていると、こわばっていた秋斗くんの表情が一瞬でくずれさった。

「そんな簡単なことでいいの？ 良かった。じゃあ、早速行こうか」

……へ？

サラリとそう言われ、手首をつかまれる。呆然としているうちに、秋斗くんの指先が空中に四角を描く。その大きさは、ちょうど彼の頭がスッポリと収まるほどのもの。

四角の始点と終点が繋がった、その瞬間。秋斗くんがなぞった部分が淡く光って、私がまばたきを一つしている間にそれは、大きな赤い木製の扉に変わっていた。

「扉の中は結構不安定だから、ちゃんとおれに——」

「ちょ、ちよっと待って！」

「どうしたの、美結さん。おれがついているから、大丈夫だよ？」

きょとん、としながら不思議そうに私を見下ろす秋斗くんの手を、私はあわててふりほどいた。

「そういうことじゃなくて！ 私、まだ行くとは一言も口にしていないんだけど」

「え、だってさっき……」

「そうよ。魔王を倒して世界を救ったら——」

「だから救ったよ？ ついこの前、あっちの世界の魔王を倒したんだ」

「見に行ってもいいって——、へ？」

私は、思わず呆けた声を発してしまう。

ちよっ、今なんて……。

私の視線の意味をくみとつたらしい、秋斗くんは照れたように頬をかく。

「最近、こっちの世界に来てなかったでしょ？ 美結さんに会いにくるのを我慢して、その間に魔王討伐の旅に出ていたんだ、おれ」
「魔王討伐、ですって？ なんでそんな……、この前にも言ってなかったじゃないの」

「だって、美結さんが望んだから」

ニコニコ、と嬉しそうに話す秋斗くん。

いやいやいやいや。私は、何度もこまかに首をふつた。

「私が望んだのは、今さっきよ？ 秋斗くん、あなたまさか、その犯罪的すぎる力に加えて、予知能力まで持っているの？」

「うっん、持ってないよ。でも、そんな能力があれば便利そうだね」

便利そうだねって……。彼ならさもありなんって感じで、ものすごく怖いんですけれど。

じゃあ、どういうこと？ 私がクエスチョンマークをいっぱい飛ばしている、秋斗くんが私の名を呼んでくる。

「きみさ、新居にはお城くらいの大きさがいって言ったでしょ？」

新居にお城？ そんなこと言ったっけ。

記憶にはないけれど、その条件もかなりの難関のような気がする。
グッジョブ、私。

「お城って簡単に空き家になるものじゃないし、新しく建てようにも、適した広さの場所が見つかりそうになかったから、どうしようか考えたんだ」

そりゃあね。

どこぞの普通の王様を追い出してそのお城を奪い取るとか、そんな横暴がまかりとおる世界ってそうそうないだろうし。てか、そんなお城住みたくない。いや、住むつもりもないけれど。

「それにさ。新しく建てるなんて、そんなに待ってられるわけがないよ。おれは、今すぐにでも美結さんと結婚したいのに！」

ああ……、そうですか。

私は、他人事のようにため息をつく。

「それでね、一つ思い出したんだ。あっちの世界のお城ってさ、住まいとして使っているのは各国の王様だけじゃないんだよね」

各国の王様だけじゃ、ない？ ん、ということば――。

思わせぶりなその言葉に、私はピンときてしまった。今までの話をまとめると、つまり――。

「まさかと思うけど――、くだんの魔王様もお城に住んでたりなんかしたんじゃない……！」

「わっすごいね、美結さん！ まだそこまで話を進めていないのに、どうしてわかったの？」

う……っ。キ、キラキラとした尊敬の眼差しが、つきささって痛い。

それから逃れるように視線をそらしながら、私は頭を抱えてその

場にうずくまりたい衝動を必死に抑えこんでいた。

つまり彼は、私が住居にお城を望んだから、それを手に入れるためだけに魔王を倒しに行ったってことですか——！？

(12) (後書き)

今年の更新は、以上で終了となります。

ご覧いただき、本当にありがとうございます。

年明けの更新については未定ですが、またお付き合いと応援を頂ければ幸いです。

では、よいお年を。

ありえない。ありえない。ありえなさすぎるでしょうが。

どこの世界に、お城を望まれたから魔王を倒しに行きましたって勇者が――。ここに、いた。

ドツとあふれだした疲労感と一緒に肩を落とせば、私のお腹が情けない音を立てる。

もう、こんなタイミングで鳴らなくても……。ってそういえば、まだ夕飯を食べていないんだっただけ。

「美結さん、お腹空いているの？」

秋斗くんにたずねられ、私は素直にうなずいた。

「ああ……、うん。秋斗くんが来る前、ちょうど夕飯を食べようとしていたところだったから」

「そうなんだ。じゃあ、あっちに行くのは夕飯を食べてからにしようか」

いや、まだ行くななんて一言も――反論しようかと思ったけれど、さすがに往生際おつじょうぎわが悪い気がする。でも、どんな世界かもわからないのについていくにはさすがに不安が――。私が一人で悩んでいる間に、秋斗くんの指先が、クルと宙に円を描く。

と、目の前にあった大きな赤い木製の扉が、音もなく消えさる。それを見届けてから、秋斗くんは一つ息をはくと、少し目を伏せた状態で私にきいてきた。

「あのさ、美結さん。その……、あがらせてもらってもいい？」

玄関で靴をぬいてもらい、なんだか緊張気味に見える秋斗くんをリビングに案内する。ここに来るのは初めてじゃないでしょうに、どうしてそんなに固くなることがあるんだか。

リビングの入り口で辺りを見渡す彼にソファーをすすめながら、私は冷めてしまったあんこ入りパスタを持ち上げ、キッチンに移動した。

「懐かしいな、美結さんの家。全然、変わってない」

秋斗くんの声を背に受け、私はオーブンレンジのスイッチを押す。暗かったレンジ内に独特の光が照らされ、お皿が回りはじめる。それをぼんやりと眺めていると、秋斗くんの質問が続けて耳をうつた。

「おじさんとおばさんは？ 相変わらず、海外暮らしなの？」

「そうよ。この前帰ってきたから、しばらくはまたあっちだと思う」

ピー。レンジのあたため終了音。

お皿を取り出そうと手を伸ばせば、「そっか」とあっさりした秋斗くんの返答が聞こえる。

「じゃあ、あの夜と一緒にだね。二人きり、なんだ」

「！」

カタ。淵に指が当たり、私はお皿をつかみそこねてしまう。

二人きり。言われてみれば、確かにそうだ。だから、どうしたって？ 彼は、そう。声は多少違っているけれど、小学校三年生の幼馴染。平常心、平常心、と。

「あの夜は――、美結さんがずっと傍にいてくれて嬉しかったな」

あの夜？ ああ、あの時のか。

冷静さを取り戻した私はようやくお皿を手にすると、リビングに足を向けた。

確かあれは、私が高校に上がって間もなかった頃。秋斗さんと暮らしていたおじいさんが突然亡くなって、彼が天涯孤独の身になった日のことだった。

彼の両親はもつと前に行方不明になっていたから――って、あれ？　じゃあ、一人になってしまった幼いあつくんの面倒を見ていたのは……。

「あ！」と嬉しそうな声があがり、私はふけっていた回想を中断させた。

「美結さんの料理も久しぶりに見るよ。この黒いのはあんこだよな？　あ、のりもある。こっちの緑のは――、もしかしてレタス？

うわゝこの斬新な組み合わせ、変わらないなあ」

「よかったら、秋斗くんも食べる？　今日のアんこ入りパスタは、ちよつとやさつとの出来じゃないんだから」

「うん。美結さんの作ったものなら、よろこんで」

キッチンからもう一組のお皿とフォークを取ってくると、それに半分ほどを分ける。

秋斗くんが「いただきます」と両手を合わせ、フォークに絡めとられたパスタが彼の口の中へと消えていく。と同時に響きわたったのは、割れんばかりのさわやかな爆笑だった。

「ははははは！ 思ったとおり、意味もなくめちやくちや甘いね、これ！」

「失礼ね、意味はあるわよ。この絶妙な甘さ加減がわからないの？ それにね、あんこは何にでも合うスーパ―調味料なんだから」

少しだけムツとしながら、私も彼の隣で自分のあんこ入りパスタを口にはこんだ。

うん、甘い。この適度な甘さとどこから感じ取れるコーヒーのほろ苦さがわからないなんて、もったいなさすぎるってば。

うんうん、とうなずきながらフォークを動かす私に、秋斗くんはどこか感慨深そうにつぶやいた。

「美結さんのあんこ好きも、変わってないんだね」

「そう？」

「うん。全然……、変わってない」

？ なんだか、ちょっと様子がおかしいような？

そう思ったのも一瞬のこと。いつものさわやかな表情に戻った彼は、嬉しそうに私の料理をたいらげ始めた。その横顔が幼いあつくんに重なり、そういえばあつくんもこうやって食べてくれたっけ、と懐かしい気持ちになってしまう。

私もつられてフォークを動かしていたらしい、あつという間に二枚の使用済みのお皿が出来上がった。

ふう、満足。やっぱり、あんこは私の世界を救ってくれる。

「さて、と。片付けないと」

「あ、片付けはおれがするよ」

立ち上がろうとした私を、秋斗くんが制する。

「え、別にいいのに。これくらい、そんなに手間じゃないし」

「いいから。食べさせてもらったんだし、片付けくらいおれにやらせてよ」

両手を差し出し、秋斗くんはニコと笑う。

私は、そんな彼と手にした使用済みのお皿とを交互に見比べる。

まあ、彼には便利そうな能力もあるようだし、そこまで言うなら――
」。

「なら、お願いするわ」

「やった！　じゃあ、美結さんは休んでいてね」

私から二枚のお皿の受け取り、秋斗くんは喜びいさんでキッチンへと移動していく。

どうせ、さっきみたいな手品がイリュージョンを使ってパパッとやってしまう気なんだろうけど。

ふう、と私は息を吐いた。

休んでいてとは言われたものの、特にすることが思いつかない私はキッチンをのぞきこみ、秋斗くんの手が蛇口をひねる現場に出くわす。もう、終わってしまったのね。さすがに早い。

一人で納得していると、泡だったスポンジがお皿をなでていく。
あれ？

って、普通に洗ってるしっ！

カチャカチャカチャ、とお皿どうしがぶつかりあう音。それを響かせながら、秋斗くんはちよつと恥ずかしそうに目を伏せる。

「なんだかこうやって洗い物をしていると、家事を分担している新婚夫婦って感じがするな……」

さり気にな新婚とかつけて強調しないでください、そこ。

私がジト目で眺めていると、突然ガシャン。派手な音が耳をうつ。お皿を割ってしまったらしい、青ざめた秋斗くんが私に焦ったような視線を向けてきた。

「ご、ごめん、美結さん！ 手がすべっちゃって」

「お皿のことは、気にしなくてもいいから。それより、秋斗くん。けがは——」

私は、言葉の続きをのみこんだ。

フワ、と秋斗くんの泡まみれの両手に集まる破片たち。ああ、どこかでみたわ、この光景。

大小いろいろな破片が、またたきをしている間に一枚のお皿に戻ったのは言うまでもない。

そんなハンドパワーが出来るんだったら、最初からその能力使って、皿洗いをしていればよかったでしょうに。まったく、もう……。

「もしかして、心配してくれたの？ 美結さん」

「そ、そんなんじゃないわよ。ただ、お皿の破片が排水溝に流れてつまったら嫌だなんて思っ——」

「ありがとう」

私の台詞をさえぎって、秋斗くんが告げてくる。

ぐっ。それは……、卑怯すぎるでしょう……！ そらすにそらせなくなつた視界で、彼のキラキラ輝く満面の笑みが咲きほこる。私がかチンと固まっていると、その整いすぎたフェイスからサラリと

した次の発言が飛び出した。

「それじゃ、行こうか。あっちの世界に」

(14) (後書き)

Twitterを始めてみました。使い方がいまいちわかっていませんが、適当に自作品のことや小ネタでもつぶやいてみます。お気軽にからんでやってくださいませ♪

アカウント名『rinrinka』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097z/>

幼馴染→→→恋人になる条件

2012年1月13日18時17分発行